



郷土資料室所蔵資料から

『奈良坊目拙解』 15巻15冊

むみょうえんこう 著
無名園古道 著

無名園古道、俗名村井勝九郎（1681～1749）の著。古道は、『南都名所集』を著した村井道弘を父として、奈良の東城戸町に生まれ、西城戸町に居を移す。外科医を業とするかたわら地誌に情熱を注ぐ。関係著書は10余冊。

本書は35年をついやし、享保20年（1735）に完成した漢文の地誌。巻頭の自序で、従来の名所案内記類は、「ただ寺社の濫觴古跡名産の由来のみにして四

民居所の町名を記さず」と指摘し、その欠を補うことを志したと述べる。

内容は南都七郷より説き起こし、市内各町々の境域や隣接地、町名由来、寺社堂塔の由来、町内の古伝、現況および家数・人口などを約200種の古典書目から引用傍証する。内容が豊富で、信ずべきものが多く、文献句碑による考証を主とした奈良の本格的な地誌。

- 郷土資料室所蔵資料から『奈良坊目拙解』 … 1
- 新コーナー“温故知新”
 〈県立図書館開館100周年に向けて
 —図書館をめぐる人々(1)〉 … 2
- 書誌データベースの構築に向けて 7 …… 4
- レファレンスあれこれ(18) …… 5
- 近代文学と奈良 11
 谷崎潤一郎の『吉野葛』と奈良 …… 7
- 「県内公共図書館 蔵書横断検索」サービスについて … 9
- 〈ワンポイントアドバイス〉雑誌は、どこにありますか？ 10
- こぼればなし …… 11
- Pick up テーマ『化粧』 …… 12

県立図書館は、6 年後の 2009 年 11 月に 100 周年を迎えます。

私たちは県立図書館の歴史を振り返りたいと考え、前回までは関係者のインタビューを中心に取り組んできました。今回からは「図書館をめぐる人々」と題し、今まで県立図書館の活動に関わってきた図書館内外の人々を順次取り上げていく予定です。

今回は、水木要太郎（元奈良女子高等師範学校教授）、高田十郎（元奈良県師範学校教諭）、保井芳太郎（郷土史家）と、野村伝四（元県立図書館長）、仲川明（元県立図書館長）の 5 名を取り上げることにしました。

この 5 名は、いずれも明治・大正・昭和戦前期を中心に活躍した人々で、水木は歴史家でコレクター（史料収集家）、高田は郷土史家・童話作家、保井は郷土史家でコレクター、図書館関係者である野村・仲川も民俗学・郷土史に造詣が深かったといえます。

しかもこの 5 名のうち、水木・高田・保井は、明治末期から大正・昭和期にかけての郷土運動がさかんな時期に、郷土史の編纂や郷土史会等の活動を通じて県立図書館との接点があったのです。

当時、県立図書館では、地域文化活動の拠点として読書会や講演会・郷土関係展示会・童話会等の多彩な活動をしており、水木・高田・保井ら地域の知識人や文化人との関わりも深く、また図書館内部からこれを支えた野村・仲川が存在も大きかったといえましょう。

以下、5 名が活躍した足跡を紹介します。



みづ き よう た ろ う

水 木 要太郎 (1865～1938)

水木要太郎は、愛媛県に生まれ、奈良県尋常師範学校教諭、奈良県尋常中学校（旧制郡山中学校）教諭を経て、奈良女子高等師範学校（現 奈良女子大学）教授となり、昭和 13 年（1938）6 月、73 歳でこの世を去った。

要太郎は歴史家であり、コレクターとしても有名で、「大和の水木か、水木の大和か」といわれたほど、大和のことなら何でも知っており、「大和の生き字引」といわれた。

要太郎が残した「大福帳」（天理大学附属天理図書館蔵）などから、彼の交友関係は広く、大和地方を中心とする「文人」の世界が形成されていたことがわかる。そのなかには、保井芳太郎、高田十郎、および仲川明の名がみえた。

また、当館とのつながりも深く、明治 42 年（1909）11 月 1 日の開館式には来賓として出席したり、評議員（明治 42 年 6 月 25 日任命）や珍書展覧会の委員をつとめるなど運営にも関わっていた。

このため、当館では、没後の昭和 13 年（1938）7 月 9 日に「水木十五堂（雅号：十五堂）を偲ぶ会」を開き、さらに昭和 42 年（1967）11 月 4 日に「大福帳展」を開催した。

著書に『吉野精華』『大和巡』『大和地理歴史』『大和乃栞』『奈良縣地誌』などがある。

（分領 秀昭）



の む ら でん し

野 村 伝 四 (1880～1948)

野村伝四は鹿児島県に生まれ、明治 39 年（1906）に東京帝国大学文学部英文科を卒業した。大学在学中に夏目漱石に指導を受けたそうで、いわば漱石の門下にあたる。漱石との関わりは『漱石全集』の日記編などに多数記録されている。大学卒業後、佐賀県、愛知県、大阪府の各中学校の英語教師をし、大正 10 年（1921）3 月に奈良県の桜井高等女学校（現 桜井高等学校）で校長に就任する。『郷土歴史人物事典 奈良』によると、在勤中に校内で「漱石展」を開催したらしい。

その後、昭和 3 年（1928）に五條中学校（現 五條高等学校）の校長となり、昭和 10 年（1935）6 月に奈良県立図書館の館長に就任し、昭和 17 年（1942）4 月まで在勤する。満州事変勃発以後、戦争の影響を受けた大変な時期に館長在任中であつたようで、その当時

刊行していた『奈良県立奈良図書館月報』で彼が記述している多数の文章にも、軍国主義の時代が反映している。このような状況下で、奈良読書会の会長として毎回読書会に県内外の有識者を招き、県下の読書の振興につとめた。著書に、『南和の俗信』『ことばの奈良』『大和の垣内』などがある。

（尾松 謙一）



たか だ じゅう ろう

高田十郎 (1881～1952)

高田十郎は、明治14年(1881)、兵庫県赤穂郡矢野村小河^{おおご}に生まれた。明治40年(1907)に奈良県師範学校の国語・漢文の教師として赴任し、昭和6年(1931)まで25年間の教員生活のあと、昭和27年(1952)6月18日、71歳で死去した。

十郎は、郷土史家として『添上郡誌』の編纂、『奈良県風俗誌』編纂委員嘱託、奈良県史蹟勝地調査会地方委員嘱託、大和史学会幹事などを歴任。奈良郷土会(昭和10年設立)や奈良県童話連盟(昭和15年設立)の会長をつとめた。

十郎の地方史編纂をはじめとする諸活動を支えたのは、県内の各小学校に在職していた師範学校の教え子の存在であろう。『奈良県風俗誌』の編纂では各小学校の協力があつたし、奈良郷土会や奈良県童話連盟の活動でも、各小学校の教員が中心となって運営していた。

一方、県立図書館との関係も深い。当館の主要な活動の一つである奈良読書会にはたびたび講師として招かれ、珍書展覧会にも委員として運営に関わった。また十郎の教え子であり、郷土史家・童話家である仲川明が館員であったことから奈良県童話連盟や奈良郷土会の事務局が当館におかれていたことも奇縁とはいえないであろう。

著書には、『大和の伝説』『奈良叢記』『奈良百題』『随筆民話』『奈良井上町年代記』『なら』など奈良関係の多数の著作がある。とくに仲川明らとの共著『大和の伝説』は、当時民俗学会で高い評価をうけたという。(山上 豊)



やす い よした ろう

保井芳太郎 (1881～1945)

保井芳太郎は、明治14年(1881)、葛下郡王寺村(現 北葛城郡王寺町)に生まれた。郷土史家であるとともに、コレクターでもあり、王寺の郷土史研究をきっかけに、大和全域の史料収集をするようになった。集められた史料のうち、鎌倉・室町から江戸時代の印刷物を含んだ古文書類は、天理大学附属天理図書館に「保井文庫」として所蔵されており、また、推古・天平の逸品の古瓦類は、天理参考館に収蔵されている。

芳太郎は、大正12年(1923)に「大和史学会」を設立した。同会は、当時の奈良女高師(現奈良女子大学)教授の佐藤小吉・水木要太郎が協賛し、高田十郎・森口奈良吉らも会員で、機関誌『やまと』(のち『大和史学』)を発行するなど大和の郷土史研究の草分け的存在であった。

また、昭和7年(1932)10月に当館が開催した珍書展覧会の委員をつとめるなど当館との関わりは深い。

著作物には、大和の古寺や遺跡をとりあげた『大和上代寺院誌』(大和史学会 1932年)があり、また『大和王寺文化史論』(大和史学会 1937年)は、芳太郎のはからいで石田茂作など著名な学者を執筆者に選び、資料提供をしたこともあって、本書は高く評価されている。(西川 慶子)



なか がわ あきら

仲川明 (1899～1971)

仲川明は、明治32年(1899)、大阪市に生まれた。大正14年(1925)から県立図書館に司書として勤務。昭和20年(1945)から24年(1949)まで館長を務める。図書館員のかたわら奈良郷土会や奈良県童話連盟の発足に関わり、図書館に事務局をおいた。明は郷土史家であり、童話家であり、俳人でもあった。(俳号は「日月子」(ニチゲツシ))

著作物を多く残しており、非常に筆まめな人だったようである。明は、大福帳と矢立を持ち歩き、汽車通勤の間や、寺社へ行ったときなど、様々なところでスケッチをした。その数は180冊にのぼる。その一部は、『大福画帖』(1969年刊)として出版されている。このほか明のハガキを編集した『かしわら随筆』(1955年)も興味深い。

これらの著書から、明の交友関係の広さ、時代状況などはもちろん、当時の県立図書館の様子が読み取れる。例えば、図書館主催の講演会や読書会の講師を描いたものが数枚ある。このほか昭和20年に平城村押熊(現奈良市)に貴重資料を疎開させたことや、初めて奈良へ赴任した知事や部長に、大和の歴史や美術の本を薦めたことも記されている。

(高辻亜由美)

-----【主な参考文献】-----

乾 健治 『郷土歴史人物事典 奈良』 第一法規 1981年

国立歴史民俗学博物館編 『企画展示 収集家100年の軌跡—水木コレクションのすべて—』 1998年

大和タイムス社編 『大和百年の歩み 文化編』 1971年

仲川 明 『大福画帖』 1969年

『奈良県立奈良図書館月報』 1923～1942年

※本文中の人物スケッチは仲川氏の筆による。

書誌データベースの構築に向けて

— 遡及入力現状 (7) 和漢古書 —

はじめに

奈良県立図書館では平成7年度より、新県立図書館に向けて、奈良・橿原両館の所蔵資料のデータベース化をすすめてきた。平成15年3月末現在、図書、絵地図、古文書、公文書等約387,600件、雑誌2,900タイトルを、当館ホームページの蔵書検索システムで検索することができる。絵地図をはじめ奈良に関する一部の資料についてはデジタル化をすすめており、目録データにリンクをして、その画像をホームページで閲覧することも可能である。

また新県立図書館での公開に向けて、戦争体験文庫用図書のデータベースも構築中であるほか、今後マイクロフィルムなどの非図書資料についても順次データベース化を予定している。

こうした中で、平成12年度に奈良・橿原両館所蔵の和漢古書の再整理とNACSIS-CAT（国立情報学研究所総合目録データベース）によるデータベース化を業者委託により行なった。ここではその概要について紹介したい。

奈良県立図書館所蔵の和漢古書

当館では平成15年1月末現在、奈良・橿原両館合わせて、約11,196点の和古書、5,380点の漢籍を所蔵しており、分野別の所蔵状況は歴史・地誌が28%、文学が約20%、哲学・宗教が18%、総記が13%、芸術が7%、その他14%となっている。

古いものでは元和3年(1617)刊行の「倭名類聚鈔」(わみょうるいじゅうしやう)、寛永年間の「二牀節用集」(にたいせつしょうしゅう)などがある。奈良に関するものは、「南都名所記」(なんとめいどころき)、やまとめぐり「大和廻」(和州巡覧記)など江戸期の奈良の名所旧跡の案内記や、奈良町の由来を記録した「奈良坊目拙解」など、地誌類をはじめとして見るべきものが多い。奈良絵本「牛若」も貴重な一書である。一般書は「和漢三才図会」ろっかしゅう「節用集」せつようしゅう「六家集」など、主として当時の教養書、実用書、文芸書及び經典等各分野にわたっており、芭蕉関係については「梧一葉」(きりひとのは) (秋田屋[徳]右衛門、寛政8)「笈之小文」おののこぶみ

(橘屋治兵衛、宝永6)などをまとめて所蔵している。その他刊本ではないが大和の陵墓を描いた彩色図「大和國古陵図」や、茶室の起絵図なども含まれている。

和漢古書の書誌データ作成

和漢古書については一般図書と同じようにNACSIS-CATによりデータベース化を行なった。

データベース化にあたって、和古書・漢籍の範囲をどのように定義付けをするかがひとつのポイントとなった。当館では、和古書については、明治期以前に刊行または書写されたものとし、明治期の活版図書のうち和装のものなどもこれに含めることとした。また漢籍については中国人が中国語で著した書物で、民国年間以前に刊行されたものとした。しかし実際の振り分け作業に入ると、近代に発行された新書とこうした古書の中間的な図書も多く、紙の質や、木活字版によるものか、そのほかの活字版によるものか、刊年の記載のないものなど、それぞれの微妙な差異をどのように判断すべきか迷うことも多く、漢籍の専門の方にレクチャーをしていただくなどしながら作業をすすめた。

国立情報学研究所は現在「和漢古書に関する取扱い(案)及び解説」「和漢古書に関するコーディングマニュアル(案)」を公開し、和漢古書についてのデータ入力基準の検討をすすめているが、当館が和漢古書のデータベース化に着手した時点では、データの入力基準については未整備の段階であり、和漢古書特有の書誌事項を踏まえながら、奈良県立図書館の入力基準を設定する必要があった。

データの各項目をどの程度の精度で採るか、異名をもつ著者は何を基準に採るか、複数ある出版者の採り方、奈良の出版者の扱い、複数の著作の合綴書の目録記述はどうするのか、など書誌事項の各項目の細部についてNACSIS-CATの入力基準である「目録情報の基準第4版」や「日本目録規則 1987年版改訂版」ともすり合わせながら、

委託先の古典籍担当者のアドバイスも含めて検討を行い、当館の入力基準をまとめた。

書誌データの特徴として、和漢古書は出版点数、残存点数が限られており、固有の来歴をもつものが多く、データは当該図書固有のものとして作成されている。NACSIS-CAT ではひとつの書誌データを、同一本を所蔵する複数の図書館が共有することが基本であるが、和漢古書の場合は同一本であるか否かの判定が困難であることから、共有はしないという考え方が強い。

和漢古書の装備

所蔵の和漢古書の保存状態は比較的良かったが、補修方法の不適切なもの、一部が破損しているものもあった。再整理にあたって資料本体にはできるだけ手を加えないよう、請求記号ラベルの貼付だけにとどめ、バーコードラベルは中性紙のスリッパに貼付して資料本体に挟むこととした。

資料保存のために帙のないものや、あっても破

損しているもので、とくに必要なものについては新たに無^む双^{そう}帙^{ちつ}を作成した。また、卷子本等については保存箱を作成した。

今後に向けて

和漢古書の再整理を行ったことによって、当館の和漢古書の書誌データ作成基準を整えることができた。今後も奈良に関するものを中心に和漢古書の収集を計画しているが、資料整理にあたっては和古書・漢籍に対する基礎的な知識と、少なくとも書誌事項の読解が出来ることが必要であり、こうした面での目録担当のスキルアップもひとつの課題である。

また資料保存の面から見て、帙等の装備が必要なものがまだかなりある。書庫の狭あい化により和漢古書のスペースが狭く、貴重資料としての取り扱いが十分でないが、新館に向けて今後改善していきたい。

(井上はるみ)

レファレンス・あれこれ (18)―①

■ 閲 覧 室 ■

Q "evolution" を「進化」と訳した最初の日本人は誰か?

A この質問を寄せられた方は、既にご自身でいろいろと調査をされ、おおよその見当をつけておられました。その方の推測では、訳者は明治初期の知識人結社「明六社」に属していた人物、おそらく加藤弘之ではないか、ということでした。

まずは、“明治”“翻訳”などのキーワードで検索をし、当館の所蔵資料にあたることにしました。『日本近代思想大系 15 翻訳の思想』(岩波書店)の「明治初期の翻訳」という章には、当時の翻訳事情が詳細に記されていました。加藤弘之と同じく明六社のメンバーであった西周^{にしあまね}が、いくつかの英単語に新しい造語をあてたといった記述がありましたが、“evolution”についての言及はみつきりませんでした。

ついで、「進化」という言葉そのものを調べることにしました。『日本国語大辞典 第二版』(小学館)では、語によっては出典・用例、語誌が記載されています。「進化」の項をみますと、evolutionの訳語、とあり、用例文には加藤の著作『人権新説』からの文章が引用されていました。また、語誌によると、「進化」は『人権新説』出版以前、加藤の主宰した大学紀要雑誌に学生が発表した翻訳論文にも見られるが、加藤の造語と考えられ、『人権新説』の出版後広く一般に浸透した、ということでした。

この調査では、加藤弘之が“evolution”に訳語を与えた、という明確な記述を見いだすことはできませんでしたが、上述の資料を紹介することをもって回答としました。

(徳山さおり)

■ 児 童 室 ■

Q アイヌの文化と言葉について知りたい。

A アイヌの文化について、『ベスト図解百科』学研 2000、『総合百科事典ポプラディア』ポプラ社 2002、『こども世界百科』平凡社 1985、『児童百科事典』平凡社 1956 に全体の概要が、四辻一郎著の『物語 アイヌのくらし』毎日新聞社 1971、『アイヌのトミじいさん』牧書店 1969、『アイヌのむかし話』国土社 1974 に詳しく書かれている。他に、アイヌ民族として初の国会議員となった著者が子ども時代の思い出とそのころの生活などをまとめた『たくさんのふしぎ傑作集 アイヌ ネノアン アイヌ』萱野茂/文、飯島俊一/絵 福音館書店 1995 がある。

アイヌとは、12 世紀以前から北海道を中心に樺太（サハリン）や千島列島、本州北端部に居住してきた独自の文化や言語を持つ先住民族のことを言う。「アイヌ」は、アイヌ語で「人間」を意味していて、アイヌが歴史的に居住してきた土地は人間の大地（世界）という意味の「アイヌモシリ」と呼ばれている。アイヌの人々は「コタン」と呼ばれる村（集落）に住み、男性は主に狩りや魚とり、樹木の伐採、木工などを、女性は家事や植物採集、機織などの仕事を受け持っていた。その精巧な木工彫刻や、「アットゥシ」と呼ばれる織物にはアイヌ独特の伝統的な文様が描かれている。また他に、「イオマンテ」別名くま送りと呼ばれる儀礼や、文字を持たない民族として口承文学「ユーカラ」と呼ばれる叙事詩など特徴ある文化を今に伝えている。

アイヌの言葉については、『郷土の研究 方言を調べよう①北海道地方』福武書店 1990 に「アイヌの言葉は、日本語とはまったく別の言葉で発音や言い表し方などが違う」と書かれており、その中に「アイヌ語の世界」として 120 ほどの言葉が紹介されている。

また、『国際理解に役立つ世界の遊び①アジアの遊び 1』ポプラ社 2001 にはアイヌの伝承遊びも紹介されている。絵本『カムイチカパー神々の物語―』四宅ヤエ/語り、藤村久和/文、手島圭三郎/絵 福武書店 1984 は、カムイ（神）・ユー

カラの世界を手島氏の力強い版画とともに深く心に訴えかけ、自然と共生するアイヌの心を感じさせる。
(松村 順子)

■ 郷土資料室 ■

Q 金峯山寺蔵王堂の節分行事で「福は内 鬼も内」と言うが、その語源を知りたい。

A 七世紀に役行者が創設したと言われる蔵王堂で行われるこの追儺（節分）行事は、「日数心経」「星供秘法」「鬼火の祭典」の三行事によって構成されるが、近年は「鬼火の祭典」で総称される。役行者が生駒山で修行中、悪事を働く鬼の夫婦を法力で改心させ、弟子にしたという故事にちなんで行われる。

金峯山寺では全国各地から追い出された鬼をすべて吉野山に集め、大導師の法力と般若心経の功德で悔悛・平伏させ、仏道に帰依させる。このため「鬼は外、福は内」といわず「福は内、鬼も内」と呼び入れ、善の道へ導こうとする。この年頭行事は、庶民の先祖祭りと農耕儀礼とが仏教に結びついた行事でもある。

もともと鬼は祖先の象徴であり悪疫や災厄を払ってくれる善神であるとする古い信仰がそのまま伝えられている。また、節分は立春の前日で大寒の末日にあたる。昔は立春を年の改まる日と考えたので、新しい季節を迎えるにあたって邪気を払う必要があった。鬼も福とともに内に迎えて、内なる邪気の退散を願ったのだと思われる。

年中行事に関する質問を受けるたび、大和の国の神事・仏事の多さに驚かされるが、豊かな伝統を身近に感じるひと時でもある。

《参考文献》

『節分』 (第一法規)

『日本伝奇伝説大事典』 (角川書店)

『吉野町史下巻』ほか

『怪異の民俗学 4 鬼』 (河出書房新社)

『吉野の祭りと伝承』 (桜楓社)

(上田 壽恵)

谷崎潤一郎の『吉野葛』と奈良

「私が大和の吉野の奥に遊んだのは、既に二十年程まえ、明治の末か大正の初めの頃のことである」^①という書き出しで始まる谷崎潤一郎の『吉野葛』は、奈良県の吉野川流域を主な舞台とした作品であるが、この成立に関してどのような事情が見受けられるのだろうか。『私の貧乏物語』^②に

「吉野葛」の時は、あれは早くから腹案らしいものがやや漠然と出来かけていたが、それでもそれから足かけ三年と云うものは頑張り通した。私は最初あのテーマを「葛の葉」と云う題で書きかけてみたが吉野の秋を背景に取り入れ、国栖村の紙すき場の娘を使うことが効果的であることに気が付いて、(中略)その年の秋の来るのを待って、吉野山から国栖村に遊んだ。だが、たった一回の旅行だけでは心もとなない気がしたので、翌年の秋の来るのを待ってもう一度出かけ、今度は暫く山の中に滞在した。

とある。そして昭和5年10月23日奈良県吉野郡吉野山サクラ花壇方より東京市牛込区喜久井町21谷崎清二宛の封書に「御手紙拝見、其後小生当分此处之山中に立籠り仕事をしているので、手紙もここへ回送されるよう」(『書簡』)^③とあり、また、当時の宿帳の10月21日の欄に「兵庫県武庫郡本山村谷崎潤一郎四十五歳 著述」^④とあり、さらに「大正十一年の春には、僕は彼女と娘とを伴って両親の白骨を高野山へ納めがてら吉野や京洛の地に遊び」(『佐藤春夫に与えて過去半生を語る書』)^⑤とある。そして野村尚吾氏の谷崎潤一郎年譜によると、「大正十五年・昭和元年四月に吉野山から奈良へ旅行。昭和五年十月下旬、吉野山サクラ花壇に一ヵ月余滞在して『吉野葛』を脱稿」(『伝記谷崎潤一郎』野村尚吾 六興出版 昭和47年)とあるのから考えると、実際に数回吉野地方を訪れて満を持し、暫く吉野山のサクラ花壇に滞在して入念に構想されて執筆されたらしいことが伺える。

では、谷崎潤一郎自身が『創作余談』^⑥の中で「一番我が意を得ている題は、『吉野葛』と『卍』である。この二つは題と内容とがよく一致していて、動かしようがない」と述べている『吉野葛』は、どのような内容の作品なのであろうか。

南朝の後裔自天王をめぐる歴史小説を計画していた語り手の「私」は、友人の津村が親戚を訪う機会に吉野川を遡り、菜摘の里の旧家に静御前ゆかりの初音の鼓を見に行く。大谷家でそれらを見た帰り道、津村は自分と鼓にかかわって今は亡き母に対する恋慕の情を告白する。以前、見つけた手紙をてがかりに、母の生国の国栖を訪ね、母の姉にあたる「おりと」から事情を聞いたことがあった津村は、その時知った娘に亡き母の面影を重ねるようになり、結婚を申し込む。一方「私」は歴史小説の資料を探訪するため吉野川を遡るのが粗筋であるが、とりわけ私にとって印象深いものを、「妹背山」にある章中で見ていく。まず上市の町並みの情景描写に関して次のようにある。

建物の古い割に、何処の家でも障子の紙が皆新しい。今貼리카えたばかりのような汚れ目のないのが貼ってあって、(中略)それが澄みきった秋の空気の中に、冷え冷えと白い。(中略)とにかくその障子の色のすがすがしさは、軒並みの格子や

建具の煤ぼけたのを、貧しいながら身だしなみのよい美女のように、清楚で品よく見せている。私はその紙の上に照っている日の色を眺めると、さすがに秋だなあと云う感を深くした。(中略)そこに反射している光線は、(中略)身に沁みるように美しい。澄み切った秋空のもとにある古い日本の美しさが神秘的で鮮やかである。本文では、これだけに止まらず吉野各地の特色ある自然・風物が随所に見られる。また、次のようにある。

「じゃあ、あの、親狐の皮で張ってあるんで、静御前がその鼓をぼんと鳴らすと、忠信狐が姿を現わすと云う、あれなんだね」

これは、長坂成行氏も指摘されているが^⑦、『義経千本桜』第四「河連法眼館の段」^⑧を踏まえたものであろう。これを一例として、この作品中に



は、吉野の古典文学にゆかりのある話が多く登場する。

では、彼がこのような古い日本的な神秘的美しさや古典・伝統文学を数多く描いたのはどうしてであろうか。

現代小説全集谷崎潤一郎集著者年譜^⑨、並びに前出の野村尚吾氏の年譜によると、彼は「大正12年9月1日、避暑中の箱根で関東大震災に遭い、箱根から神戸に向かい、10月に京都市上京区等持院中町」に落ち着き、その後数回転居し、「昭和3年秋に兵庫県武庫郡岡本梅ヶ谷に転居」とあるように、震災を契機として偶然、関西に居を構えた。そしてその前後の心境について、彼自身は次のように述べている。^⑩

私は大正10年の春、大正活映の「蛇性の姪」のロケーションで久方振りに京都や大和地方を訪れてから好きになっていたのであった。(中略)旧き日本をエキゾティズムとして愛するのだ(中略)旧い東洋の良いところが、日本の旧都付近にも残っていることを知ったのである。(中略)それらを(中略)東京より遙かに魅力あるものとして愛着をもった(『東京をおもう』)

このことから彼は、震災以前に日本の旧都付近にもの珍しさから異国趣味を見出していたらしいことが伺える。そして「ただ震災後、ほんの一時の避難のつもりで関西へ逃げて来たことが、私を今日あらしめた第一歩であったように思われる」(『東京をおもう』)とあり、また、「最初は決して此処にいつく気はなく(中略)腰かけと云うつもりだったが、しだいに臀が落ちついてしまった」(『岡本にて』)^⑪とあるようにもとよりこの地に長く住みつく気はなかったらしい。ところが「大正十二年に罹災民となって流れて来てから、すっかり関西に居着いてしまって、そのせいかだんだん上方が好きになって来る」(『饒舌録』)^⑫とあり、震災地の焼け跡にぼつぼつバラックが建つようになると、仲間は次第に関東に引き揚げてしまったにもかかわらず、「私だけは此方に居着いてしまった(中略)関西の地そのものが(中略)大阪や京都や奈良の旧い日本が、知らぬ間に私を征服してしまった故」(『東京をおもう』)とあり、また、我が大日本帝国は気候温暖にして風光明媚…と小学校の読本で教えられたことに関して、「あれに当て嵌る『日本』は、何処にあるかと云えば、大

阪から中国に至る本土の西半分なのである」(『私の見た大阪及び大阪人』)^⑬とあるように震災後関西に居着くことによって、この地に対する理解と愛着が次第に深まるとともに大阪や京都や奈良に残る古くて美しい日本の風物や古典・伝統文化に目を奪われていったようである。そして『細雪回顧』^⑭の中で彼自身が「大正末年私が関西の地に移り住むようになってから私の作品は明らかにそれ以前のものとは区別される」と述べ、佐藤春夫が『吉野葛』は、「作者が急角度を以て古典的方向に傾いた記念的作品で、彼が第二の出発点として意味深い作品」(『最近の谷崎潤一郎を論ず』)^⑮と評しているようにこの作品中に見られる古い日本美や古典・伝統文学への認識は、関東大震災による関西移住を契機に関西の歴史・風土や伝統文化との接触によって育まれたことが一因となっていると言えるのではないだろうか。そのような意味で、彼の作風の変化に関西(奈良)が一翼を担った役割は大きいと考えられる。

《引用文献》

①・②・③・⑤・⑥・⑨・⑩・⑪・⑫・⑬・⑭

『谷崎潤一郎全集』第13, 21, 24, 20, 21, 23, 21, 20, 20, 22巻 中央公論社 1973・1974年

④「谷崎潤一郎」(田中昭三『文士の大和路』小学館 1998年)

⑦「吉野と谷崎潤一郎」(浅田隆 和田博文編『文学でたどる世界遺産・奈良』風媒社 2002年)

⑧『竹田出雲 並木宗輔浄瑠璃集』新日本古典文学大系 93 岩波書店 1991年

⑮『定本 佐藤春夫全集』第20巻 臨川書店 1999年

《主要な参考文献》

○ 浦西和彦 浅田隆 太田登 編『奈良近代文学事典』和泉書院 1989年

○ 中田睦美「谷崎潤一郎」(浅田隆 和田博文編『古代の幻 日本近代文学の＜奈良＞』世界思想社 2001年)

○ 野口武彦「故郷としての異郷」(谷崎昭男他『群像日本の作家8 谷崎潤一郎』小学館 2001年)

○ 中島一裕「谷崎潤一郎『吉野葛』の世界」(帝塚山短期大学日本文芸研究室『奈良と文学—古代から現代まで』和泉選書 37 1988年) など

(宮坂 実三)

「県内公共図書館 蔵書横断検索」サービスについて

当館では、県立奈良・橿原図書館が所蔵する資料の目録情報を平成9年2月からインターネット上で公開しております。また、県内の市立図書館や町立図書館でも資料の目録情報をインターネットで公開しているところが増えてきました。(現在、10図書館が公開)

皆さんは、必要な資料が当館または県内にある他の公立図書館(10図書館)で所蔵しているかを図書館やご自宅からインターネットで確認できるようになりました。

これまでは皆さんが必要な資料を探す場合、各図書館のホームページを開き、それぞれの蔵書検索用データベースで所蔵状況を確認しなければなりませんでした。そこで当館では、より効率的に県内の図書館をご利用いただくために「県内公共図書館 蔵書横断検索」サービスを平成14年12月から開始いたしました。

蔵書横断検索

県内図書館の横断検索サービスです。
お使いのブラウザを JavaScript を有効とする設定でご利用ください。

検索条件

書名		書名のよみがな	
著者名	姓	姓のよみがな	
	名	名のよみがな	
出版者名		出版者名のよみがな	

※ 検索条件を入力し、図書館を選択して[検索実行]ボタンを押してください。
※ 奈良市立図書館、生駒市図書館、大和郡山市立図書館を選択する場合はよみがなも入力してください。
※ 選択した図書館の検索結果が検索終了順に表示されます。

検索実行 **リセット**

図書館選択

全選択 **全解除**

☒ 奈良県立図書館	☒ 図書 ☐ 雑誌 ☐ 巻号タイトル ☐ 論文 ☐ 公文書 ☐ 古文書 ☐ 絵図
☒ 奈良市立図書館	☐ 全部 ☐ 図書 ☐ 雑誌
☒ 大和郡山市立図書館	☒ 図書 ☐ 雑誌 ☐ AV ☐ HS
☒ 生駒市図書館	☐ 全部 ☐ 図書 ☐ 雑誌
☒ 川西町立図書館	☐ 全部 ☐ 図書 ☐ 雑誌 ☐ AV
☒ 田原本町立図書館	☐ 全部 ☐ 図書 ☐ 雑誌
☒ 王寺町立図書館	☐ 一般書 ☐ 児童書 ☐ 雑誌
☒ 太田町立図書館	☐ 一般書 ☐ 児童書 ☐ AV ☐ 雑誌
☒ 大和郡山市立図書館	☐ 全部 ☐ 一般書 ☐ 児童書 ☐ 参考書 ☐ 地域の資料 ☐ 大活字本 ☐ 雑誌 ☐ 視聴覚
☒ 橿原市立図書館	☒ 図書 ☐ 雑誌 ☐ AV

このサービスをご利用いただくと、当館及び県内の市町立図書館(インターネット上で所蔵資料の目録情報を公開している10図書館)の蔵書が一度に探せます。利用するには当館ホームページ(URLは<http://www.library.pref.nara.jp/>)で「県内公共図書館 蔵書横断検索」という項目を選んでいただくと検索画面が表示されます。どうぞ、ご利用ください。

(尾松 謙一)

雑誌は、どこにありますか？

当館では購入・寄贈あわせて約 1,300 タイトルの雑誌を所蔵しています。

配 架 内容によって、郷土・一般・児童に区分して配架しています。

◇郷土資料室には、奈良県関係の雑誌を開架し、主に学術誌は請求記号順に、その他の雑誌は誌名の五十音順に配列しています。

◇読書室には、購入雑誌の最新号、及び1年保存の寄贈雑誌を開架しています。

◇児童室には児童用雑誌・児童文学関係雑誌の最新号と一部のバックナンバーを開架しています。

開架雑誌は自由に閲覧できますが、バックナンバーのほとんどは書庫内に保存しています。

書庫内の雑誌を利用される際には「書庫資料閲覧票」に記入して職員に請求してください。

紀要、論文集、報告書など、学術誌には請求記号を与えています。請求記号のないものは巻号または発行年月と誌名をご記入下さい。

検 索 永年保存雑誌、購入雑誌は、タイトル、巻号、特集名などがデータ入力されています。

【検索初期画面 例】

Web-OPAC での検索の際、資料種別に区分をつけずに検索すると、図書、雑誌、公文書、古文書、絵図すべてが検索対象になります。雑誌のみを検索したいときは unnecessary 資料区分のチェックをはずして検索してください。

【検索結果画面 例】

誌名をクリックすると、所蔵巻号、特集名、貸出状況などを確認することができます。

ここをクリック

所蔵

所在	請求記号	所蔵年	所蔵巻号	備考
1 一般書庫		1991-2003	416-22.24-33.36-45.48-54.5-15.16(1-10)	

各号の情報

☐ 巻 ☐ 号 ☐ 年 ☐ 月の前後を 10 件 表示

巻号	発行日	所在	請求記号	資料ID	製本状態	貸出区分	状況(返却予定日)	備考
1 16巻10号通巻799号 '03.3.10	2003年3月10日	一般書庫		311080673	一般			
2 16巻9号通巻798号 '03.3.3	2003年3月3日	一般書庫		311080572	一般			
3 16巻8号通巻797号 '03.2.24	2003年2月24日	一般書庫		311080482	一般	貸出中 2003/04/06		
4 16巻7号通巻796号 '03.2.17	2003年2月17日	一般書庫		311080412	一般			
5 16巻6号通巻795号 '03.2.10	2003年2月10日	一般書庫		311080351	一般			
6 16巻5号通巻794号 '03.2.3	2003年2月3日	一般書庫		311080270	一般			
7 16巻4号通巻793号 '03.1.27	2003年1月27日	一般書庫		311080209	一般			
8 16巻3号通巻792号 '03.1.20	2003年1月20日	一般書庫		311080146	一般			
9 16巻2号通巻791号 '03.1.13	2003年1月13日	一般書庫		311080063	一般			
10 16巻1号通巻790号 '02.12.30-'03.1.6合併増次号	2003年1月6日	一般書庫		311079942	一般			

予約

巻号	予約人数	予約
16巻8号通巻797号 '03.2.24	0	予約

ここをクリック

【検索画面 例 詳細】

貸出中の資料は予約することができます。

当館では、検索画面上で予約がかけられるネットワーク予約サービスを行っています。

ネットワーク予約にはID番号とパスワードが必要です。

メール・アドレスをお持ちの方は一般カウンターでお申し込みください。

貸出・複写

◇雑誌のバックナンバーは貸出できます。郷土資料室所蔵の雑誌は貸出いたしません。

◇著作権法の範囲内で複写ができます。ただし最新号の複写は行っていません。(1枚20円)

◇最寄りの図書館などを通じての協力貸出や複写依頼にも応じています。

☆当館未所蔵の雑誌について、他機関の所蔵調査、掲載された記事や論文の複写依頼も行っています。
詳しくは一般カウンターでおたずねください。

(館内奉仕係)

● 乙 ぽ れ ば な し ●

奈良県立図書館で複写サービスを始めたのはいつからですか？

昭和44年2月1日からです。

当時は電子式リコピーという湿式の複写で、細かい字は写りにくく時間もかかりました。乾かないうちに触ると指紋が残るので、職員は気を使いました。それまでは書き写す以外に方法がありませんでしたから便利になりましたが、コピーをとって料金を払い、とったコピーを忘れて行かれる方もありました。

料金はサイズ別になっていて、B5 15円、A4 20円 B4 25円。A3サイズはとれませんでした。

昭和48年4月1日から電子式複写に変わりました。

昭和44年当時のものの値段は、ハガキ 7円、アンパン 20円、牛乳 23円、

キャラメル 30円、週刊誌 70円、コーヒー 100円だったようです。

(『値段史年表 明治・大正・昭和』週刊朝日編 朝日新聞社 請求記号：337.82-8)

Pick up!

【テーマ】『化粧』

化粧という言葉の辞書で調べてみると「おしろいなどで表面を美しく装うこと」などと書かれていますが、ただ単に「美しくする」だけでなく、化粧をすると若々しい気持ちになれる、とか初めて化粧をしたときにいつもと違う自分になったような気がした、など心の奥底でいろいろな思いを感じられるものではないかと思えます。

今回はそんな化粧について、いろいろな分野の本をご紹介します。

□…開架図書 ■…閉架図書

化粧・化粧品品の歴史をみる

現在までの化粧の歴史について読むことができます。

- 『古代人の化粧と装身具』（刀水歴史全書 25）
原田淑人著 刀水書房 383.3-4
- 『シルクロードの化粧史』（シルクロード史考察：正倉院からの発見 18）
森豊著 六興出版 702.2-33-18
- 『顔の文化誌』（東書選書 126）
村沢博人著 東京書籍 383.56-5
- 『モダン化粧史：粧いの 80 年』
ポーラ文化研究所編 ポーラ文化研究所 383.56-8
- 『化粧品のブランド史：文明開化からグローバルマーケティングへ』
水尾順一著 中公新書 576.7-18

昔の化粧方法についてみる

現在でいう美容雑誌のような本です。

流行や化粧方法こそ違いますが、女性の悩みや美への欲求は今も昔も同じだな、と感じることができるかと思えます。

- 『都風俗化粧伝』
佐山半七丸著 高橋雅夫校注 平凡社
(東洋文庫) 080-6-414
- 『通俗講話科学的化粧法』
小山田謙・三本松清吉共著 東亜堂 595-3
- 『化粧の巻』（嫁入文庫第 7 編）
古宇田徹太郎著 實業之日本社 595-2
- 『前田家の化粧書』
陶智子著 桂書房 383.56-7

昔の化粧道具についてみる

昔の化粧道具には小さな容器や刷毛の一つ一つにも丁寧な細工が施されているものがありました。そのような道具などをみることができる本です。

- 『化粧道具と髪飾り：田村コレクション』
田村伎都子 383.5-タムラ
- 『化粧道具』（日本の美術 275）
小松大秀執筆・編集 至文堂 705-13-275
- 『日本の化粧：道具と心模様』（ポーラ文化研究所コレクション 2）
ポーラ文化研究所編著 ポーラ文化研究所 383.56-6

化粧・化粧品を科学的に考える

私たちが普段つけている化粧品の原料や肌の構造、化粧品をつけることによってどのような変化があるのかについてみることができる本です。

- 『エイジングの化粧学』（シリーズ高齢社会とエイジング 3）
尾澤達也編 早稲田大学出版部 369.26-242-3
- 『ヒット化粧品：美を創る技術を解き明かす』（くらしの中の科学と生物）
日本農芸化学会編 学会出版センター 576.7-ニホン
- 『化粧品科学』
佐藤孝俊・石田達也編著 朝倉書店 576.7-17
- 『スキンケアの科学：化粧品の効能書きに強くなる』
藤本大三郎著 講談社（ブルーバックス）595-30

化粧を題材にした小説・随筆など

- 『小説に見る化粧』
陶智子著 新典社 910.26-599
- 『化粧』（日本の名随筆別巻 39）
高樹のぶ子編 作品社 914.6-2006-B.39
- 『江戸の化粧品小間物店其他』（川柳江戸名物図絵 第 5 巻）
花咲一男編 近世風俗研究会 911.45-6-5
- 『化粧』（渡辺純一全集第 10 巻）
渡辺淳一著 角川書店 918.6-461-10

(木田 博子)

利 用 案 内

開館時間	閲覧室、読書室、学生室 9：00～20：00 郷土資料室、児童室 9：00～17：00
休館日	月曜日・祝日・月末・年末年始 図書点検期
交通案内	近鉄奈良駅から東へ徒歩 5 分

奈良県立奈良図書館報 うんてい 第 74 号 平成 15 年 3 月 30 日発行

《編集・発行》 奈良県立奈良図書館 ☎630-8213 奈良市登大路町

TEL. 0742-27-0801 FAX. 0742-27-0865 URL <http://www.library.pref.nara.jp/>